

⑦市が中心となって取り組むまちづくりの動き

現在計画されている開発等を整理すると図のようになります。

①川崎駅北口地区市街地再開発事業

駅ビルに隣接して「リパーク」として完成している第1街区に続き、第1街区と京浜急行の線路の間にある地区を第2街区、線路の先を第3西街区、さらにその先を第3東街区といいます。第2街区は調査・地元協議、第3西街区は平成7年3月に川崎駅北口第3西街区再開発準備組合が設立され、平成9年10月に第一種市街地開発事業として都市計画決定、平成10年3月には市街地再開発組合が設立され、事業を進めているところです。

④京浜急行大師線連続立体交差事業

京浜急行電鉄(株)及び川崎市では、沿道の交通渋滞の解消を図るために、京急川崎駅から小島新田駅の間約5kmの区間で、鉄道の地下化による14カ所の踏切の除却と、一部現在線のルート変更による新駅の設置などの事業を推進しています。川崎大師駅から小島新田駅までの区間については、平成11年度末現在約7割が用地買収済みとなっています。

②富士見周辺地区

富士見公園及び周辺地区を総合的・一体的に整備を進め、川崎都心部の拠点の整備を図ります。「富士見周辺地区整備基本計画(素案)」が平成7年に公表されており、これを基本に進めています。富士見中学校の改築工事等が完了、建設から約50年が経過した川崎球場は解体、北側の区域については現在検討を進めている段階です。





⑤川崎縦貫道路第1期分

国道15号～東京湾岸道路までの延長8.4kmにわたり、他の幹線道路と広域的な結びつきを可能とする川崎縦貫道路の一般部と専用部の建設を促進しています。事業主体は専用部は首都高速道路公団、一般部は建設省です。

③浮島町地先地区第Ⅰ・Ⅱ期埋立地

浮島町地先地区第Ⅰ・Ⅱ期埋立地は、その広域的な立地条件を活かした土地利用が検討されています。

⑦市民健康の森

健康都市宣言を記念し、水と緑の恵みをいかした市民健康の森づくりを、検討委員会の設置から候補地の決定等を含めて市民とのパートナーシップにより推進する事業で、各区毎に森づくりを行っていきます。川崎区でも平成12年現在検討を進めている最中で、平成12年6月には川崎区での検討委員会も7回を数え、候補地を富士見公園、浮島町公園、ちどり公園、東扇島西緑地、東扇島東緑地の5つに絞り込み、さらに最終候補地を決めるための方法などを考えました。今後、さらに候補地を絞り込む検討作業などを行っていきます。

⑥東海道貨物支線旅客化

東海道貨物支線の旅客線化は、みなとみらい21地区から鶴見を経て川崎臨海部を通り、東京の都心方向へつながる構想です。一部区間については新線整備を検討しています。平成12年1月の運輸政策審議会答申においても、「今後整備について検討すべき路線」として位置づけられました。浜川崎から川崎新町間の南武線の改良と川崎新町から川崎間の路線の新設を検討している（仮称）川崎アプローチ線と共に、「京浜臨海部の再開発等に係る輸送需要動向等を踏まえ、可能な区間から段階的な整備を検討する」とされています。

東京湾

0 500 1000 1500M



8 今の川崎区のように.....

今の川崎区を土地の利用の仕方からとらえると、川崎駅を中心とした川崎都心部、住宅を中心とした既成市街地、工場地となっている臨海部、そして多摩川に分けてとらえることができます。

コラム ●今の川崎区の動き

○川崎都心部(駅周辺のにぎわい)

- ・ 古くは川崎宿の宿場町として、そして明治、大正、昭和、平成へと移る中で、川崎市の中心地として、交通、商業・業務、産業の中心地として飛躍的に発展してきました。
- ・ 大正時代に耕地整理が駅周辺で行われましたが、現在の区画は、基本的に戦後の戦災復興土地地区画整理事業によってできあがりました。
- ・ JR川崎駅の東側を中心に、商業・業務施設や市役所・区役所などをはじめとした官公庁施設が立地するほか、マンションなども立地しています。

○既成市街地(住宅を中心としたまち)

- ・ かつては農地が広がる田園風景の地域でしたが、戦後の戦災復興土地地区画整理事業によって現在の都市基盤が整備され、住宅を主体とするまちとなっています。
- ・ 一部土地地区画整理事業が実施されていない地域では、道路が狭いなど基盤が未整備な住宅を中心とするまちとなっています。
- ・ また以前は、臨海部の工場に勤める人向けの社宅が多くありましたが、近年では工場移転等に伴って、社宅や工場の跡地がマンションなどに建て替えられつつあります。

○臨海部(第1層：市街地に連続する工業地、第2層：運河で分けられた工業地、第3層：40年代以降の埋め立て地)

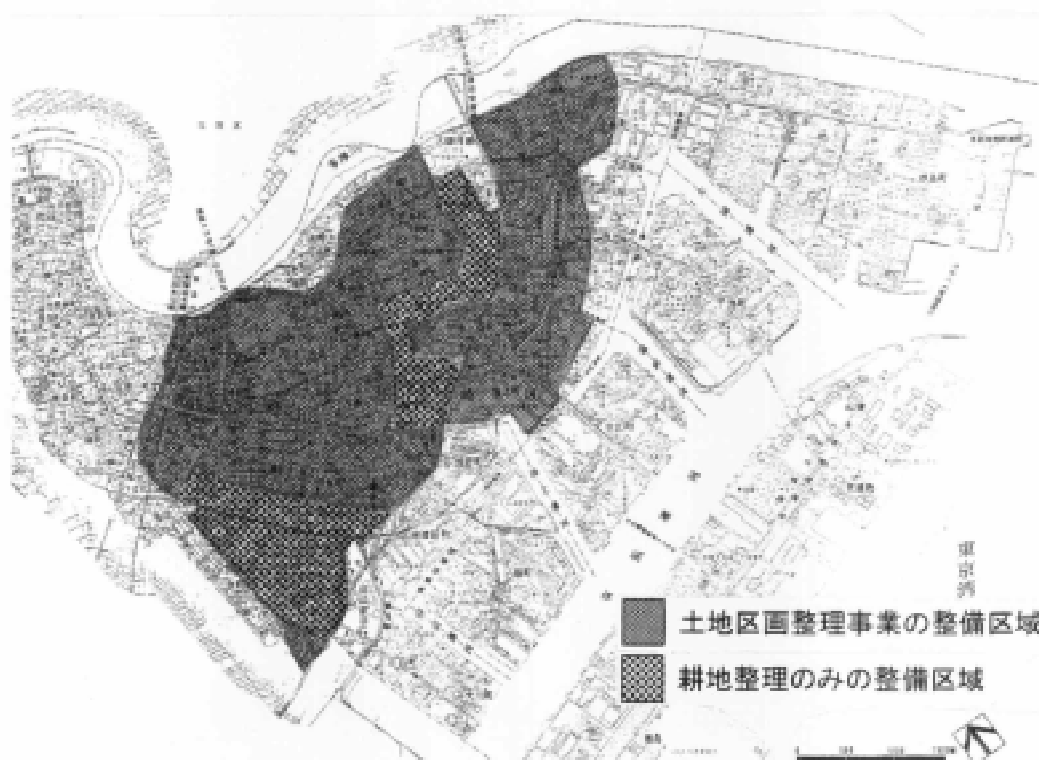
- ・ 大正時代から徐々に埋立が進められてきましたが、戦前・戦時中は京浜工業地帯の一翼として発展し、また戦後も日本最大の重化学工業地帯として発展してきました。また戦前から進められてきた大師臨港地帯土地地区画整理事業によって現在の臨海部第1層が概ね形づくられました。
- ・ 臨海部は埋立の経緯や土地利用の状況などから、さらに市街地に連続する工業地の第1層、運河で分けられた第2層、昭和40年代以降の埋め立て地である第3層に分けることができます。
- ・ 近年では、産業構造の転換や国際的な生産分担の動きの中で閉鎖される工場などもあり、その工場跡地の利用をどのように進めるかが大きな課題となっています。

- ・そのほか臨海部では、市民と市が一緒になって検討を進めている「市民健康の森づくり」や、臨海部第2層を南北に結ぶ道路の整備構想、工場から発生する排出物・廃棄物の再利用・再資源化、省エネルギー・省資源化を目指した、環境調和型まちづくりを進める「ゼロ・エミッション工業団地」づくりなどが進められています。
- ・一方今まで産業地であった臨海部の性格を大きく変える動きが出てきました。平成10年5月に手塚治虫ワールド研究会が「(仮称)手塚ワールド」の建設について、浮島町を最終候補地として決定しました。しかし事業化にあたっては様々な課題が残されています。
- ・またそのほか、産業の再編に伴う工場の閉鎖や閉鎖した工場の跡地を今後どの様に利用していくべきか検討が行われています。

○多摩川

- ・古くは渡し船によって江戸と川崎を結び、交通の要衝となっていた多摩川は、歴史的に見ても川崎区にとって大切な資源です。
- ・多摩川は、広大な河川空間が水と緑の緩衝地帯としての機能を担いながら、市民に憩いの空間を与えています。しかし川崎区内では、河川沿いや臨海部の工場地によって市民にはなかなか近づきにくい空間となっています。

川崎区内の開発状況



コラム ●今の川崎区の様子



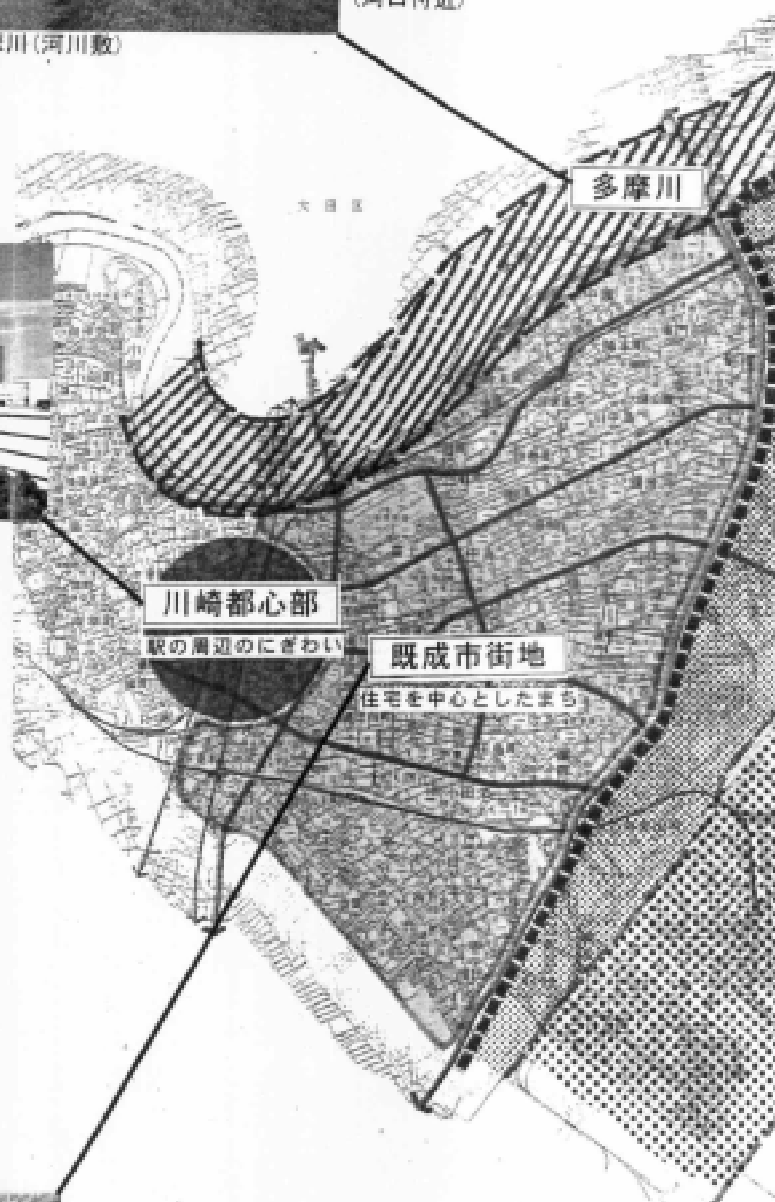
多摩川(河川敷)



(河口付近)



川崎都心部(川崎駅前)



既成市街地(マイロード小田)



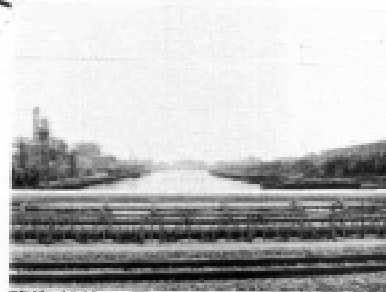
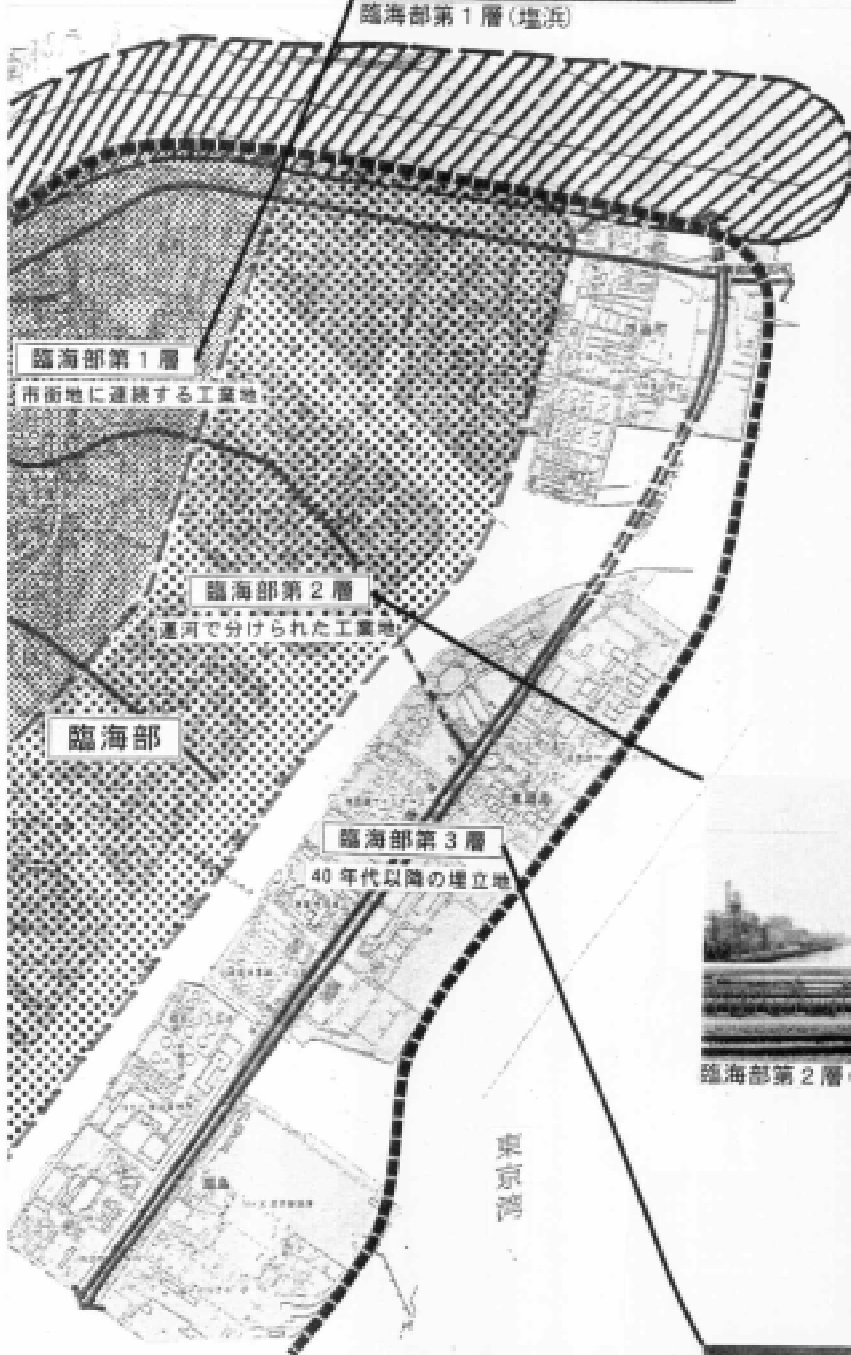
(小田)



(渡田向町)



臨海部第1層 (塩浜)



臨海部第2層 (南渡田運河)



臨海部第3層 (浮島方向)